

## 秘話「義経物語」

香川 湧慈

日本の歴史の中で、理想的な指導者は誰か、と尋ねられたら、迷わず「源義経」と答えます。

「判官びいき」という言葉がありますが、これは義経が「九郎（父、義朝の九番目の息子）判官」と呼ばれていましたので、庶民の人気のあったことから、ついつい「ひいき」してしまう呼び名。

奥州藤原秀衡の里から出て来て「一の谷のひよどり越え」「屋島の合戦」「壇ノ浦」と、平家を追討して、哀れにも消え去るまでは、たった二年間の出来事です。

静御前との大ロマンスと言われるが、あれもたった半年のことなのです。

実に、この短い義経の一生が冠として歴史に残ったのは何故なのか。

それは、弁慶はじめ亀井、片岡、伊勢、駿河という義経の側近と主従関係、人間関係の温かさにあったのです。

三万と言われた平家の軍勢に「ひよどり越えの坂落し」は、たったの百五十騎です。

百五十騎で三万の軍勢を蹴散らしたのです。

屋島の合戦、同じく三万の平家に対し三百五十騎です。まさに百倍に値する中に乱入して相手を蹴散らしたのです。

何故に、弁慶はじめとする義経の家臣達が強かったか。その連中は打って一丸、義経と共に進み、義経と共に退いて、誰一人先陣の争いをする者は無かった。すべては、殿の為に、、、しかなかった。

勿論その代わり「ひよどり越えの坂落し」に於いては義経自ら先陣を切って、、、、坂から落ちたのは義経です。

将足るべきの義経が「我に続け！」としか言わなかったのです。

頼朝のように、自分の弟達をやらしておいて、後から「やれ！やれ！」等と、、、、。

でも言いたいのは、この何万の軍勢、何百倍の相手に見事戦い抜いたこの豪傑共。

一糸乱れずに纏め上げたこの人間関係の見事さ、豊かさ。その意味に於いて義経は最高の指導者だと言いたい。

さあ、義経という人物は、どういう人であったかという事を、いくつかの秘話を参考に供します。

一、木曾義仲を討つ為に、頼朝の代官として宇治川で三万の軍勢の長であった義経に、瓢箪一杯の「どぶろく」を持って来た者があった。一升か一升五合くらいでしょう。義経は酒は一滴も飲まなかった人ですが、そして別に義経はじめ幹部達で飲んだところで誰も文句は言いません。義経は、どうしたかと言うと、三万の軍勢に対し「一列に宇治川に並べ、、、、」と言った。

そして馬上に乗った義経は、その瓢箪一杯の「どぶろく」を持って一番上流に進んで、一升か一升五合のわずかの酒を宇治川に流し、そして三万の軍勢に「皆で飲もう！」と一緒に宇治川の水を飲んだ。一升か一升五合の僅かな酒。何人の胃袋を満足せしめてくれるか知れているが、三万の軍勢と共に一緒に川の水を飲んだ義経の思いやりは、三万の軍勢を泣かしたのです。これが、苦楽共有であります。

義経は、そういう人物だったのです。

二、屋島の合戦の時、那須与一が扇の的を射る時に、あの玉虫という女が、この扇の的を射よ！と。義経は申しました。「東国武者の面目に賭けて、誰かあの扇の的を射る者はいないか！」勿論、那須与一は名乗って出なかった。那須与一は頼朝の家臣だから。

その時、那須与一の弟、那須大八郎が「某に御命じありまするなれば、、」と申しました。その時ついに決心したのが、那須与一でした。那須与一は心から義経を慕っていましたが、那須の頭領、一門の頭領足るが故に、彼は頼朝の家臣であった。

自分が愛する義経公に、せめて我が弟をと那須大八郎を義経に差し上げていたのであった。

もしも、大八郎が射損じたら、これは義経公の恥になる。自分が射損じたら、馬上に於いて腹割っさばいたら、頼朝つまり鎌倉殿の恥になっても、義経公の恥にはならぬと決心した。

那須与一は、大八郎に対し「舎弟、控えよ！この兄、与一を差し置いて、、、、」那須与一は別に自信があった訳ではないのです。

「与一、行ってくれるか。」と義経の命によって那須与一は、海の中へ乗り入れた。

与一は一本の矢を射て失敗したら、二本の矢を射、二本の矢を射て失敗したら馬上に於いて腹割っさばいてお詫びを、、、、と決心して海の中へ入った。

相手の扇の的の船も動いている。自分の手元の馬上も動いている。心を定めようと思えば思う程、ましてや源氏の名譽を担っていると思えば思う程、心は焦る。那須与一の的は定まらなかった。

彼は「南無八幡大菩薩」と、心に念じて眼を上げたら、「平家物語」はこう言っています。

「やや、射よげに見ゆる。」やや、射やすく見えた、、、、。けれど、何も風や波が静まった訳ではないから、客観条件が変わった訳ではないのです。那須与一の心に些かのゆとりを生じた。

その時にフッ！と、与一は己の卑怯さに気が付いた。

弓矢の一門、那須の頭領足るべき自分が二本の矢に己の命を託す卑怯さに気が付いた。

ついに一本の矢を捨てて、一本の矢に己の命を懸けた。これが見事、扇の的を射て源平の喝采を招いたことはご承知の通り。けれど、その那須与一の末路は、梶原景時がこれを頼朝に注進した。「与一の実態は、九郎の殿の為であって、鎌倉殿の為ではありません。」与一は扇の的を射たばかりに、領地没収、蟄居謹慎になった。まさに那須与一の末路は哀れであった。

壇ノ浦の合戦の砌、源平まさに同数の船戦をやった。殊に一方に於いては名将で名高い平知盛との間の戦いであった。現在の下関の干珠・満珠という島に兵を据えた義経は、この流れ込んで来る海流は二時間したら逆流する。その二時間の逆流を待つべく源氏は、ちりじりバラバラにその時逃げた。

船の中の座敷牢に入れられていた那須与一、居ても立ってもおられず、座敷牢を蹴破って番兵の弓を取り上げるなり、腕の覚えのある弓を射た。これが劣勢が挽回となり、源氏は船戦を立て直し勝利となった。

源平の戦いのフィナーレとも言うべき壇ノ浦の決戦は那須与一によるところが真に大きかった。那須与一は座敷牢を破ったかどにより、その晩、梶原景時の手によって切腹させられた。那須与一の末路は実に哀れなものであった。

三、人と言いますものは、栄えて行く主人になら仕えられます。でも落ち行く主人に仕えられるか。いわゆる、不遇に育った義経は兄頼朝と戦いたくはなかった。戦えば農民は田畑を荒らされ、町民には沢山の父無し子が出る。自分達一門が亡びさえすれば、世の中に平和が来ると考えた。

義経は家臣達一同に、共に九州に逃れ出る事を言いました。付いて行ったところで一国一城の主になる訳ではなく、見つければ殺されるだけの、この落人足るべき主人に三百五十騎の家臣達は妻子を置いてまでお供申し上げる。

九州へ逃れんとする時に、静をはじめとする女房達を伊豆有綱（いずのありつな）一人を護衛に付けて、大物ヶ浦（だいぶつがうら）にて待てと。そして義経が弁慶はじめ家臣を連れて、正面から討って出た。

自分の方に焦点を向けておいて女房達を逃がした。伊豆有綱、大物ヶ浦に着いて、いくら待てど義経は来なかった。待つこと二時間。ついに痺れを切らした伊豆有綱は、逆コースを執って義経を迎えに行ったのが運命の皮肉。

義経が弁慶配下を連れて血みどろになって大物ヶ浦に来た。見れば伊豆有綱は居なかった。海で育った弁慶、伊勢三郎（いせのさぶろう）駿河二郎（するがのじろう）達は、天候を見ておれば、早く船を乗り出さねば暴風雨に巻き込まれる。

「早く乗り候へ」と、義経に如何に勧めても義経は、たった一人の有綱を捨て兼ねた。

寄せては返すこの敵中の中に於いて弁慶は申しました。「我等とて同じこと。有綱殿とて同じこと。今、ここに於いて殿から捨てられたとしても露更、お恨みは致しません。早く船に乗り候え！」と如何に弁慶が勧めても、義経は頑としてたった一人の有綱を待つと言う。

ついに、弁慶は腕力を以って義経を抱き上げ船に乗せようとした。

その時に義経は持っている扇で弁慶を打ち据えた。

「その気持ちは粗略には思わぬが、今ここで一人の有綱を捨てて行くことは、九郎（自分）の心に生涯の間、悲しみを残せと言うのか。」と義経。弁慶はハラハラと涙を流して申しました。

「我等、家臣達一同は、一人の家臣に対してでも命を懸け給う殿の優しさ故、今日までお共申し上げることが出来た。その殿の優しさ故に我等一門は、この期に果てるやも知れぬ。

しかしながら、この優しい殿の為に地獄の底までお共申し上げようではないか。」

家臣達一同は涙を絞ってそこに座った。

寄せては返すこの敵中であって、伊豆有綱、敵中を蹴破ってやって来た。やれ嬉しや。義経は有綱を抱くようにして船に乗ったが、時すでに遅く、暴風雨に巻き込まれて船は木の葉の様に散ったのであった。

日本の歴史の一頁はここで変わった。

あの時、有綱一人を捨ててあつたら、日本の歴史は変わったでしょう。

しかし、この危急存亡の時に於いて、たった一人の家臣に対しても義経は命を懸けた。

四、悲しい物語になった吉野の山で別れた静御前との物語。義経と言えば静。

吉野の山で義経と静の別れてゆく場面は誠に哀れな場面でした。

「判官思い切り給う時には、静思い切らず、静思い切りける時は、判官思い切り給わず。

互いに行きては戻り、戻りては行き従いけり。峰に登り、谷に下りて行き交うほどに、静はるばると見送りけり。姿が見えなくなる程に、静、声のかげりにおめきけり。」

と「義経記」（ぎけいき）にあります。雪の降りしきる中を静が大峰の山へ逃れて行った。という哀れな場面があります。

静が捕らわれて、蔵王堂で舞を舞わされた時にこう言っています。  
「ありのすさみの、にくきだに、有りきの後は恋しきにあかでむなしく、人の世を別れのことに  
悲しきは親の別れ子の別れ、すぐれてげに悲しきは夫婦の別れなりにけり。」  
(生きている間、憎いと思うた人も死に別れてみれば懐かしい。何も飽きもせず無理矢理引き  
別れさせられた人の世を、別れも親との別れ子との別れがあるが、特に悲しいのは夫婦の別れ  
だ。)

静の籠が鎌倉へ送られると聞いた時、居ても立ってもおられぬのは、この伊豆有綱です。  
自分があの時の不心得をしなかったら、悲劇は起こらなかった。と感じ、静の籠を奪還せんと  
して、有綱は義経にお暇（いとま）を申し上げた。  
義経はその時、ハラハラと涙をこぼして言うた。  
「静を失うた気持ちは悲しいが、更にそなたを失う気持ちは悲しい。側におってくれい！」と。  
伊豆有綱の手を取って言うた。  
けれどその夜、伊豆有綱は逐電してただ一騎、静の籠を奪還せんと奇襲を掛けた。

しかし、運命は皮肉でした。

静の籠の御用責任者は和田小太郎義盛（わだのこたろうよしもり）でした。この和田小太郎義  
盛と伊豆有綱は竹馬の友だった。一番仲の良い友だった。  
この竹馬の友が静の籠を巡って、丁々発止と切り込んだ。和田小太郎義盛は密かに伊豆有綱に  
耳打ち申しました。「身共（自分）を切って静殿を奪え！」と言った。  
しかし、和田小太郎義盛を一人切ったところで衆寡敵せず、ついに奪いきれぬと考えた有綱は  
鏑迫り合いの中、逆に和田小太郎義盛に「静殿を頼む！」と言って立ったまま切腹して果てた  
のでした。

五、義経が奥州へ逃れる時に、一人一人の家臣が命を捨てて関所を破ったのです。  
勸進帳の安宅の関だけではなかったのです。一人一人が死んで義経を助けた。

こういう人間関係が、義経主従にはあったのです。

義経と言えば静。義経には弁慶が出て来ます。弁慶は本名は俊章という坊主。  
静が鎌倉の八幡宮で舞を舞わされた時、「しづやしづしづのおだまき繰り返し、、、」という文句。  
これは静が義経に初めて送った恋文の文句でした。

静が白拍子の頃、義経に与えた恋文は、  
「白糸やしづのおだまき愛（いと）し白糸色もやというなれ、人はおみなえしと草うしや紅とて  
染むもせば染むにならねば、竜胆（りんどう）の濃い紫に秋の夜の露にかもにむ」

(私は純白ですが、身分の卑しい者で、いろいろと言ひ寄って来る男は数々あります。けれど、悲しいことに夜咲いた花、誰かに染まねばなりません。同じ染まるのなら、笹竜胆の義経公の濃い紫に染まりたい。でも身分違いだから秋の夜の露の如き淡い思いかもしれないが、、、) と。この恋文が「しづやしづしづのおだまき繰り返し、、、」という歌になったのです。

しかし、世の中は皮肉でした。天下、鎌倉の面々の前で、この一介の小娘が命を懸けて義経を慕う詩と舞を舞うた。これに、はた！と心を捉えられた一人の武将があった。

これが、富樫左エ門丞（とがしさえもんのじょう）でした。あの「勸進帳」安宅の関の代官、責任者です。

所謂（いわゆる）、静の舞いに心を捉えられなかったら「勸進帳」は無かったのです。

一体この義経とは、どのような人物か。と富樫は思った。

安宅の関で、その義経が自分の前に現れた。弁慶は勸進帳は読まなかった。全く白紙の勸進帳を富樫に渡したのです。

開けて見たら何も書いていない。これで義経主従である事は明らかだ。勸進帳から富樫が弁慶を見たら弁慶は目にいっぱい涙を浮かべ、刃の柄（つか）に手を掛けた。武士の情けが分からぬのなら刺し違えてでも、という体勢を弁慶は示した。

富樫は如何にも読んだ振りをして「間違え御座らぬ。」としてサラサラと勸進帳を巻いた。

実は勸進帳は読まなかった。しかし、他の者が気付いた。「あれは義経である。」と。

義経露見。切羽詰められた弁慶は、ご承知の通り、錫杖を以って義経を打ち据えた。

余りの痛むしさに富樫は「身共が責めを負う。通られい！」と。富樫は決心をした。

虎の尾を踏み、毒蛇の口を逃れたる心地して陸奥の国へぞ下りける。と。謡いの文句にもある様に、暫く行った所で弁慶は義経の手を取って泣いた。

苦肉の策とは言いながら、主人に対して「切って捨てい！。こうしてくれるわ！。と言って、叩きに叩いたこと、腹搔っ捌いてお詫びを。」と。

そこへ富樫の使いが黄金二十五枚を持って来た。そして弁慶に申しました。

「主人、富樫左エ門丞の申しまするには、大願成就の暁まで、そなた様は絶対に離れられませぬ様に。」と。弁慶は頷（うなづ）きました。

そして、その使いが富樫の下へ帰ったら、富樫は一部始終を遺言に書いて果てました。

この様な義経主従の人間関係、家臣は主を守ることのみを思い、また主は家臣の事のみ思う。

この温かな人間関係が歴史を動かし、また、冠として歴史の中で光るのです。